

河野眞著

『ファウストとシンデレラ 民俗学からドイツ文学の再考に向けて』

斧原 孝守

一

骨格をもとめて

本書はドイツ文学・ドイツ民俗学を専攻し、近年ドイツ民俗学関係の名著を次々と世に送っている著者による、新しい論文集である。本書の内容は以下に示すように大きく三部に分かれる。

第一部 民俗文化からみたゲーテ

第一章 古典劇における歌謡の使用とその背景

第二章 「トウーレの王」とゲーテにおける民衆情念の造形

第三章 蹄鉄のパラード 文化史から見た一七九七年のゲーテの詩想

第四章 ファウスト伝承への民俗学からのスケッチ

第二部 シンデレラの構造と源流

第一章 シンデレラ譚の構造 単純な

第二章 シンデレラ譚の源流《祈る女中さん》の話型との相関

第三部 昔話の類型学に寄せて

補論《永遠なる》グリムのメルヒェン

本書の特色は、ドイツ民俗学の立場からゲーテの文学、ならびに有名な昔話である「シンデレラ」について論じているところにある。ここではゲーテの文学について論じた第一部については中心となる第四章の紹介に留め、「シンデレラ」と昔話の理論について述べられた第二部、第三部を中心に紹介し、併せて評者の意見を述べたいと思う。

二

第一部の中心は「ファウスト伝承への民俗学からのスケッチ」である。著者はファウ

ウストの伝承とその文学作品品化について、特にこれまで紹介されてこなかった伝承形態に注目し、民俗学的な角度から解明を試みている。従来、民間伝承としてのファウストについての研究は、プロテスタント教会圏におけるものが多かった。しかし著者はカトリック教会圏であるオーストリアでの伝承に注目し、旅の劇団のテキストも教会行政の動向を受けた場合があり、特にキリストの聖名をめぐる教皇勅令がファウスト伝承に新しい展開をもたらしたことを、民俗学者クレツェンバッハーの研究や演劇史の資料を挙げつつ追跡している。またカトリック教会系の伝承をゲーテが知っていたことにも注意を促している。さらに著者は、ファウストが死を前にしてキリストの絵像を悪魔に描かせるというモチーフが大きなウエイトを占めるテキストを分析し、宗教民俗学の知見を交えて民間伝承と文学という二つの領域の相関をとりあげている。

三

第二部の前半は「シンデレラの構造」である。著者はまず、従来のシンデレラ研究

が物語の核心部分よりも、「魔法」や「継子いじめ」、「悪意への対抗」といった「周辺的な要素」を重視してきたことを批判する。

著者の見るところによれば、シンデレラ譚の本質は、逆境にある主人公が「不当に強いられた苦難の末に本来の境遇や待遇を取り戻す」点にある。そして著者はシンデレラ譚から「a ある家に、台所の下働きを健気に果たして暮らす娘がいた。b 娘の前に素敵な若い男があらわれ、娘との結婚を熱望する。」(三五六頁) という骨格を取り出し、その核心には「無媒介な上昇の夢」があると見るのである。

このような著者の見方は、シンデレラを「魔法昔話」、「継子譚」の一型として理解してきた従来の見解とは一線を画するものであろう。しかし著者は、あくまでも近代以降、ヨーロッパでシンデレラが圧倒的に好まれ、吸引力をもってきたという事実から、この物語の本質に迫ろうとしている。

第二部の後半は「シンデレラ譚の源流」である。著者はここで従来の昔話研究ではまったく注意を払われてこなかった、一つ

の物語を紹介する。それは一人の敬虔な女中が神父の問いに答え、常住坐臥、常に神のことを考えていることを語る「祈る女中さん」(Die geistliche Hausmagd) という詩歌、あるいは読み物で、十六世紀以来、西洋各国で数十種類の印刷刊本として知られてきたものである。フランクフルト大学の民俗学者であったマティルデ・ハインが、その師であるベルリン大学のアドルフ・シュパーマーの研究を發展させ、それまでシンデレラ譚の初出の一つとみなされてきた十六世紀初頭の説教師の説教の中に現れるシンデレラ (Aschenputtel) は、むしろ

「祈る女中さん」に他ならないと論じた。マティルデ・ハインは併存していた「シンデレラ」と「祈る女中さん」を説教師が結びつけたとしたが、著者は徹底的に「シンデレラ」を近代の産物であると見る。すなわち「シンデレラ譚が今日親しまれているような、引き締まった運びの話になるのは、文献的にはグリム兄弟の手を経てから」であって、「グリム兄弟以前にさかのぼるシンデレラ譚の書記ヴァージョンの少なさは、それほ

ど人気のある話ではなかったことをうかがわせる」(四三八頁) というのである。さらに著者は、「シンデレラ譚は端的に近・現代においてはじめて意味があるフィクションであり、したがってその時期が来るまでは微々たる(今から見れば) 先行形態(に当たると言えなくもないもの) を除いては存在しなかつたと見る方が実態に適っているのではなからうか」(四四〇頁) と述べている。

なお著者がシンデレラの最古の類話として有名な中国唐代の随筆に見える「葉限」について、独自の見解を述べていることも紹介しておきたい。「葉限」は南方熊楠が初めて指摘して以来、中国では九世紀からシンデレラが知られていたことが半ば定説化している。それに対して著者は、「葉限」が収録されている『酉陽雜俎』続集が九世紀に遡り得るかという点に疑義を呈し、テキスト諸本の状態から見ても、早くても二三世紀以後ではないか、と検討を呼びかけている。

四

第三部は「昔話の類型学に寄せて」で

ある。ここで著者は、ドイツ語圏の口承文芸研究に関する理論・学説を見直そうとしている。その組上に載せられるのは、スウェーデンのカール・ヴィルヘルム・フォーン・シイドウ（一八七八―一九五二）とオーストリアのアルベルト・ウエッセルスキー（一八七二―一九三九）、そしてシイドウの弟子であったスウェーデンのアンナ・ビルギッタ・ルース（一九一九―二〇〇〇）である。

シイドウはアンティ・アールネの協力者で、フレイザー、マンハルトの理論の批判者として知られ、昔話研究では「オイコタイプ」（著者は「自家類型」と訳す）の提唱者として有名である。著者はシイドウの理論を「近代の国民国家の単位を背景において民族のまとまりを想定し、昔話のヴァージョンの差異をそれぞれの民族の固有性として理解」するものとし、結局のところ「現代の国民の神話の性格を付与される」と認定している。

シイドウが口承文芸の起源に焦点をあてて考察しようとしたのに対し、ウエッセル

スキーは、口承文芸の流動する実態をいくつかの概念（例えば「社会モチーフ」「奇蹟モチーフ」など）を用いて説明しようとした研究者で、リュテイーの先行者とされている。日本ではリュテイーの著作は数多く翻訳されているが、ウエッセルスキーの著作は（シイドウについても）翻訳されていないだけに、著者の解説はきわめて有用である。関敬吾は早くからシイドウとウエッセルスキーの理論に注目し紹介していたが、著者は関による紹介の不足を補いながら、その再評価と再検討を行っている。

最後に昔話研究の具体例として、シイドウの弟子であったルースの『シンデレラ・サイクル』（二九五一年刊）が検討される。この著作はシンデレラの類話二八〇余話を分析して六つのサブタイプを抽出し、その歴史的变化を見ようとしたもので、シンデレラ研究史上の画期をなすものである。著者はその要点を翻訳しながら詳しく検討し、ルースの研究が日本のシンデレラ研究ではあまり言及されていないことに不満を述べている。

しかし著者はルースの研究にも大きな限

界を認めている。それはルースの研究が（その師であったシイドウの研究も）、昔話における「完全な空想性と論理性」を、ヨーロッパ固有の資質であるとする思想に縛られている点である。そして著者は、その背景には二十世紀前半の西洋に優勢であった、西洋文化に固有の資質として論理性や合理性をみる自文化理解があったと見ている。

なお補論として付された『永遠なる』グリのメルヒェン」は、グリム兄弟にとつて古代神話の痕跡と考えられていたメルヒェンは、実は近代になって昔話が特定の土地から遊離し、逆にリアリティーを感じられるようになってきたもので、まったく近代の産物に他ならないことを、レオポルト・シュミットやパウジンガーの研究を援用しながら述べたものである。著者の基本的な立場がよく分かる一編であろう。

五

以上で明らかのように、本書（第二部と第三部）を通して、著者は一貫してメルヒェンを近代の産物であると主張している。そ

して「昔話研究の主流は、それが古い時代から連綿と続いており、しかもユーラシア大陸の各地で生きていたと見ずにはおかない。昔話研究の刷新を叫んだアラン・ダンデスですら、そうした見方にどっぷりとつかっている」(四四〇頁)と、昔話研究者の暗黙の前提を鋭く批判する。

たしかに個々の研究者がその生きた時代の思潮から逃れられない以上、ロマン主義の時代に生きたグリム兄弟がメルヒェンに古代神話の痕跡を見、二〇世紀前半に活躍したシイドウがメルヒェンにヨーロッパ固有の資質を見るところ「偏見」から逃れ難かったことは事実であろう。そして昔話という口承文芸のジャンルそのものが、近代ヨーロッパにおいて著しく脚光を浴びることになったということも、忘れてはならない視点である。

ただシンデレラを考える場合、評者は東アジアの伝承を視野に入れないわけにはいかない。著者が述べるように中国の「葉限」が一三世紀まで下るにしても、世界最古の事例であることは動かず、また類話が中国

大陸とその周辺に連続的に伝わっているからである。半世紀前、ルースは世界中からシンデレラの類話二八〇例を集成し、その系譜をヨーロッパに収斂させた。しかし近年の中国昔話のインデックスでは、五〇話に及ぶシンデレラの類話を集成しており、現在公刊されている全ての資料から類話を集めることができれば、類話はその数倍にも上るであろう。もしルース女史が現在の中国大陸における類話を知ったとすれば、彼女はどのような結論を出したであろうか。評者は、昔話は(その全てではないにしても)それなりに古い時代からユーラシア大陸で語り継がれてきたものだと考えている。しかし本書をたいへん面白く読み、大きな刺激を受けた。特にヨーロッパにおけるシンデレラの位置については、目から何枚もウロコが落ちたことを告白しておきたい。

シンデレラのように、近代ヨーロッパの昔話集によって人口に膾炙した物語の中には、類話がユーラシア的に分布しているものが少なくないが、その場合、無意識のうち

にそれらをヨーロッパからの拡散と考えてしまいがちである。しかしそれらの昔話がヨーロッパに伝わったのは、思いのほか新しいのではないだろうか。筆者が述べるように「1800年頃のヨーロッパで両者(「祈る女中さん」と「シンデレラ」)の比重が地滑り的に入れ替わった」というのも、そう遠くない過去にシンデレラの伝播があつたことを示しているのかもしれない。

してみると、シンデレラがヨーロッパ近代の産物であること、中世ではシンデレラの位置に「祈る女中さん」という話があつたこと、そしてシンデレラ(さらには昔話そのもの)がインド・ヨーロッパ語族固有のものではないとする本書は、昔話研究におけるヨーロッパ偏重の呪縛を解くものと言えよう。

いずれにしても本書は、ヨーロッパのメルヒェン、シンデレラ研究、いや昔話の全体に関心を持つ人びとにとって、従来の思考の死角をつく重要な視点を提供したものである。注目に値するものである。

二〇一六年三月 創土社刊 本体九二〇円
(おのほら・たかし/奈良県立奈良高等学校)